令和４年度　全国高等学校選抜大会　「審判員報告」

Ｃ２　審判長　　黒須真希

１．採点上打ち合わせた事項

（監督会議での報告事項も含む）

①　適用規則の確認

採点規則 2022 年版　変更規則Ｉ

女子体操競技情報 32 号

②　採点指針の確認

③　新技申請

なし

④　監督会議の連絡事項

・適用規則の確認

・採点指針の確認

・D スコアに対しての質問について

そのローテーションの間に D1 へ口頭で質問をする。意見の相違がある場合は、書面で審判長へ

・不適切なマグネシウムの使用について

・器械器具の準備について

２．採点上起こった事項とその処理

特になし

３．その他　特記事項・意見・感想等

審判業務全般においては、D1 審判を中心にスムーズに採点業務を進めることができ無事競技を終えることができました。開催県の役員の皆様に手厚いサポートをしていただいたことがスムーズな大会運営に繋がったと思っております。

今大会は 2023 年の採点指針をもとに採点を行いました。2023 年の採点指針は 2022 年から引き続き、全体としては「膝、つま先の緩みがなく手先足先までコントロールされた美しい姿勢での演技」「欠点のない正確な技の実施」の２本の柱となります。姿勢の意識をしつつ技の練習をしていくことは非常に難しいことですが、得点を上げていくには E スコアを上げることは非常に重要です。地道なトレーニングになりますが頑張ってほしいと思います。2022 年版より演技全体を通して身体の姿勢に関する減点項目の減点幅が大きくなっているため、常に美しい姿勢での実施を心がけて夏の競技会へ向けて練習に励んでいただきたいと思います。

Ｃ２　跳馬

Ｄ１審判員　山口　千重美

１．採点上打ち合わせた事項

① 採点指針の確認（情報 32 号）

・D スコアの高い跳躍技の実施

・跳躍全体にスピード感があり、高さと距離を伴うダイナミックな実施

・着地の先取りができた高い姿勢での安定した着地

上記採点指針をもとに、各審判が各跳躍の理想像を持って採点を行うこと。同じ跳躍技でも D スコアの高い跳躍技へと発展していくような実施なのか、そうでないのかを見極めること。各局面において著しい技術不良や、危険を伴うような未完成な跳躍、ダイナミックさに欠ける跳躍に対しては、第 8 章「一般欠点と減点表」、第 10 章「種目特有な実施減点」の項目を有効に使用し、厳密に減点することを確認した。

変更規則では種目特有な実施減点「※グループ１の跳躍技のみに適用」される減点項目があるため、その確認も行った。

・(追加)「支持局面　支持が長い　0.10/0.30/0.50 」

・(変更)「第２空中局面　ダイナミックさに欠ける　0.10/0.30/0.50 」

② アシスタントの任務内容を確認

・練習回数と１回の練習とカウントされるものの確認

・境界線の踏み越しについての確認

・監督からの再確認の要求に対応できるよう、すべての過失の記録は残しておく

２．その他、採点上起こった事項とその処理

跳躍を行ったが、足から先に着地しなかったと判断したため、審判長に報告をし「無効となる跳躍」とした。

３．その他特記事項・意見・感想

今大会における出場選手 55 名中、D スコア 5.0 以上の跳躍を実施した選手は１名、4.5 以上の跳躍を実施した選手は 3 名、4.0 以上の跳躍を実施した選手は 24 名で、全体を通して第２空中局面で１回ひねり以上の跳躍技に取り組んでいる選手が多い印象を受けました。また、後方伸身宙返り（跳躍番号 3.30 または、4.30）の実施を試みた選手のうち、第２空中局面において屈身または、かかえ込み姿勢と判断した跳躍は 14 跳躍ありました。今一度、採点規則の第 9 章 9.1.1 技の承認「ひねりを伴わない後方伸身宙返り」の項目を確認していただき正確な実施を目指してほしいと思います。

E スコアについては、9.0 以上の選手は 3 名で、支持局面からの突きあがりが見られ、高さやスピード、ダイナミックさがあり、着地の先取りができた素晴らしい実施でした。その

一方でＤスコアの高い跳躍技を実施しても、著しい技術不良が見られる跳躍、もしくは着地でのステップや姿勢の欠点、危険を伴うような跳躍もいくつか見受けられました。

全体として、2023 年の強化指針でも採点指針でも「Ｄスコアの高い跳躍技を実施」することを推奨はしていますが、「高いＥスコアにつながる美しい姿勢と正確で雄大な跳躍を目指す」との記載もされています。短期間で身につくものではありませんが、日々の練習から体操競技の基本である美しい姿勢、膝つま先の緩みのないもの、着地までコントロールされた正確な実施を目指し、練習に励んでいただきたいと思います。

Ｃ２　段違い平行棒

Ｄ１審判員　荒木未央

１．採点上打合せた事項

(1)　採点規則 2022 年版　変更１　情報 32 号までの適用

(2)　採点指針の確認

・指針を元に理想像を高く持ち理想から逸脱した演技においては「一般欠点と減点表」「種目特有な実施減点」の項目から必要な減点を使用し採点を行う。段違い平行棒ではけ上がり、倒立、車輪などの基本的な技においては特に注視し、膝やつま先、肘の緩みまで厳密に減点する。倒立においては振り上げる過程での姿勢は正確なのか、減点なく実施できているのかを見極める。また、支持回転系の技においては、回転の大きさがある正確な実施であれば、ひねりを伴う技や空中局面を伴う技に発展し、次の段階に繋げられるということまで頭に入れて採点する。車輪１回ひねりなどにおいては、ひねりの完了角度だけに捉われず、身体の姿勢や、ひねりのリズムまで気にしてほしい。選手やコーチに目指すべき演技が伝わるような採点ができるよう打ち合わせをした。

・変更規則Ｉの「前向きでない構成」を有効に使い、差をつける。

・短い演技についての確認

・アシスタント審判の任務確認

(3)　採点上起こった事項とその処理

特になし

(4)　その他　特記事項・意見・感想等

段違い平行棒の指針に沿った演技とそうでない演技がはっきりと分かれる大会であった。け上がりを実施した時点で膝、つま先、腕の曲がりなどの減点が発生する選手は、その後のどのような技においても同様の減点が発生する傾向にあり、ひねりや空中局面を伴う技に発展していけないような実施のように感じた。また、ひねりを伴う技においても角度の減点に影響しているように見受けられたので、基本的な技の正確な実施がとても重要である。しかし、Ｄスコアが高い選手の中でも振幅の大きさは差があり、空中

局面を伴う技やひねりを伴う技における振幅の小さい実施では、バーのしなりが使えず過失に繋がっていた。

2022 年版の採点規則になり、少しずつ選手、コーチに日本としての指針の方向性が伝わっているように感じたので、引き続き選手やコーチに採点を通し、評価できる演技とそうでない演技に対しての差がわかりやすいような採点をしていくことが強化へ繋がる近道であると感じた。

Ｃ２ 平均台

Ｄ１審判員　佐原礼香

１．採点上打ち合わせた事項

・採点指針(情報 32 号)の確認について

−常に美しい姿勢ができているかどうかを重要視する。姿勢が悪い選手については変更規則Ｉで減点の幅を大きくしている芸術性と構成の減点「身体の姿勢が悪い」「大きさ不十分」「つま先が伸びない/足が緩む/足が内向き」の減点項目に則り、(−0.10 ／ 0.30 ）を厳密に減点する。

−「つま先が伸びない/足が緩む/足が内向き」について映像で共通見解を図った。

・アシスタント審判員の任務の確認

−計時審判員の任務内容の確認（練習時間、演技時間・中断時間の計測）

コーチからの減点の再確認に備え、過失はすべて記録しておくことを確認した。

２．採点上起こった事項とその処理

特になし

３．その他　特記事項・意見・感想等

今大会は、正確さに欠ける実施や大過失のある演技が多く見受けられました。特にダンス系の技については正確さに欠ける技の実施や理想的な実施から逸脱する実施が多く、特に 180 度の開脚を要求する技での開脚不十分や、個々の技で膝、つま先が伸びない選手が多いと感じました。ダンス系の技をいかに正確に実施できるかが高い Ｅ スコアを獲得するためのポイントとなると思いますので、どの技でどれくらいの減点があるのかを選手自身でも理解し、どの技を実施すれば減点が少なくできるか演技全体で演技構成を考える必要があると思いました。高い難度点を獲得するために、ただやみくもに技を実施するのではなく美しい姿勢で正確に実施ができるように技の理想像を掲げて日頃の練習に励んでほしいと思います。

そして、採点指針の１つ目に掲げている「立ち姿勢や歩く姿勢も含め、常に手先足先までコントロールされた美しい姿勢での演技」を重要視し採点を行いましたが、美しい姿勢と思える選手が少なく非常に残念でした。立ち姿勢が猫背や肩が上がった状態で首が詰まって

いるような姿勢、１歩足を出した時に膝が伸びない、足の指先まで力が入っていない、足首が伸びない選手が多いと感じました。さらに振付で上半身は意識していても足元がベタ足、内向きなど、多くの選手が採点規則第 12 章芸術性と構成の減点項目にある「演技全体を通して芸術的表現に欠ける」減点に該当する演技となってしまいました。

ダンス系やアクロバット系の技の実施だけではなく、立ち姿勢や足を１歩出して移動する時の姿勢も演技としての評価の対象となります。どの瞬間においても美しい姿勢で演技ができなければ減点のチャンスが増えてしまいます。そして芸術的な演技にもつながりません。「身体の姿勢が悪い」「美しさに欠ける足の動き」については、演技の中でなければ美しい姿勢を意識することはできるかもしれませんが、演技の中で常に意識することは簡単なようで簡単ではく、非常に時間のかかることだと思います。技の完成度を高めることや高い D スコアを目標に難しい技に取り組むことも重要ですが、それとともに美しい姿勢を身につけることにも重点をおいていただき、今後の大会に向けて練習に励んでほしいと思います。

Ｃ２　ゆか

Ｄ１審判員　高橋洋子

１．採点上打ち合わせた事項

(1) 採点指針の確認

体操競技情報 32 号に記載されているゆかの採点指針を確認し、ゆかの演技に何が求められるのかを理解したうえで演技全体の理想像を持ち、指針に沿った演技とそうでない演技との差を E スコアにて明確に表すことを確認した。技以外の部分にも注視し、立ち姿勢が悪い、膝が伸びない、足がゆかから離れた時につま先を伸ばす意識ができていない演技に対しては変更規則 I で減点幅を大きくしている芸術性と構成の減点「身体の姿勢が悪い－0.10／0.30」「つま先が伸びない／足が緩む／足が内向き－0.10／0.30」の減点項目に則り厳密に減点することを確認した。

(2) アシスタントの任務の確認

計時・線審の任務内容を確認し、コーチから減点の再確認の要求があった際に速やかに対応できるよう、過失はすべて記録しておくことを確認した。

２．採点上起こった事項とその処理

特になし

３．その他特記事項・意見・感想等

今大会実施された全55演技のうち、8.00以上のＥスコアを獲得できたのは7演技で全体の約13%、7.50以上8.00未満が11演技で約20%、7.00以上7.50未満が18演技で約33%、7.00未満が19演技で約34%でした。シーズン始めの競技会ということもあり大過失も多く見受けられましたが、この冬場に習得した技を組み込み、新たな構成にチャレンジできた選手も多かったのではないかと思います。今後の大会に向けてより演技の完成度を高めていってほしいと思います。

今回採点をしていて特に気になったことは以下の３点です。まず１つ目はアクロバット系のひねりを伴う技の不正確な実施が複数見受けられたことです。ひねりが正確に完了しない場合は異なる技と承認され、演技構成によっては同一技の繰り返しとなり難度点が獲得できない場合があります。特に終末技が同一技の繰り返しとなった場合はＤスコアが大きく下がってしまうため、正確な実施を目指すこと、また終末技の難度点を確実に獲得できるよう演技構成にも注意していただきたいと思います。２つ目はダンス系の技での欠点が多いことです。技の承認要求を満たすことができていれば難度点は獲得できますが、実施中の身体の姿勢が美しくなかったり、着地で脚が開いていたり、バランスを崩したりした場合は減点となります。１つの技で0.5以上の減点となることも多々あります。今大会では特に上体の姿勢や腕の位置まで意識できている実施、着地までしっかりとコントロールできている実施が少なかったように感じます。難度が獲得できたか、できなかったかということだけでなく、実施中の姿勢にも意識を向け、より美しい姿勢での正確な実施を目指していただきたいと思います。３つ目は技以外の部分での身体の姿勢や膝つま先の意識ができている選手と不十分な選手の差が大きかったことです。例えば歩く時やコーナーで片足を上げた時、ゆかに接する動きを行っている時、そこから立ち上がる時など、技ではない部分での姿勢、膝つま先の意識ができていない選手がまだ多く見受けられます。技の完成度を高めることや、新しい技を習得することはもちろん必要ですが、それと同様に美しい姿勢にも重点をおき、今後の大会に向けてトレーニングに励んでいただきたいと思います。

以上